

## プラトン『国家』第10巻において

### なぜ詩人の追放が語られるのか

田中 伸司

『国家』最終巻である第10巻においてなぜ詩人追放が語られるのか。第2から3巻にも詩人追放論があることから、第10巻において再びミーメーシスを論じ、詩人の追放を告げるのは対話篇の構成として不自然である。しかも、第10巻の詩人追放論のなかで展開されるアイデア論は *locus classicus* のごとくに扱われることがあるにもかかわらず<sup>1</sup>、中心巻のそれと整合していないように見える。すなわち、第6巻において理想ポリスを制作する哲学者は画家になぞらえられ (e.g. 500e2-3)、ミーメーシスを行うと語られるが (e.g. 500b8-c7)、他方、第10巻では画家はミーメーシスを行う者として「自然本性から離れること第三のものを生みだす者<sup>2</sup>」(597e3-4)と位置づけられ、詩人たちは言論における「画家に相当する者」(605a8)とされることを介して理想ポリスから追放される<sup>3</sup>。また、第10巻ではアイデアが神によって作られたと語られるのに対して (597b4-5)、第5巻ではアイデアは「つねに同じ仕方である」(479e6-7)と語られる。制作が「以前には存在しなかったものを、後に存在へともたらす」(*Soph.* 219b4-6, cf. 265b8-10, *Sym.* 205b8-c1) ことであるならば、それらの規定は相いれないことになるだろう<sup>4</sup>。こうした不自然さと不整合

<sup>1</sup> 例えば、加藤信朗『ギリシア哲学史』東京大学出版会 1996, 158-9、M. Erler, *Platon, München* 2006, 147-8 (三嶋輝夫・田中伸司・高橋雅人・茶谷直人訳『プラトン』講談社メチエ 2015, 156-7) 参照。

<sup>2</sup> 『国家』からの引用に関しては S. R. Slings 校訂の *Platonis Rempublicam*, Oxford Classical Texts 2003 を用い、作品名を記すことなくステファヌス版プラトン全集の頁番号・段落記号・行数を付した。翻訳は私のものであるが、藤沢令夫訳 (岩波文庫 2008 [初版 1975]) を参考にさせていただいた。『ソピステス』からの引用に関しては D. B. Robinson 校訂の Oxford Classical Texts 1995 を用い、藤沢令夫訳 (『プラトン全集3』岩波書店 1976) に準拠した。

<sup>3</sup> N. Demand, 'Plato and the Painters', *Phoenix* 29, 1975, 8-10 はこの点で『国家』が一貫性を欠いていると結論する。なお、J. Tate, "'Imitation' in Plato's Republic", *The Classical Quarterly* 21, 1927, 16-23 や 'Plato and "Imitation"', *The Classical Quarterly* 25, 1931, 161-9 に代表される二種のミーメーシスに基づく解釈に対しては、藤沢令夫「補注 B いわゆる「詩人追放論について」(X. 595A~608B)」『国家』岩波文庫 2008 [1975], 465-80 及び A. Nehamas, *Virtues of authenticity: essays on Plato and Socrates*, Princeton 1999 所収の 'Plato on Imitation and Poetry in Republic X', 251-78 [first appeared in *Plato on Beauty, Wisdom and the Arts*, J. M. E. Moravcsik & P. Temko (eds.), Totowa 1982, 47-78] 参照。

<sup>4</sup> H. Cherniss, 'On Plato's Republic X 597B', *American Journal of Philology* 53, 1932, 233-42 はアイデアを神の思惟内容とする解釈 (B. Jowett & L. Campbell, C. Ritter 等) 及び神と善のアイデアを同一視する解釈 (E. Zeller, J. Adam 等) の双方を退け、神のアイデア制作の議論はプラトンがアイデア論との矛盾を承知のうえでミーメーシス的な芸術批判のために行ったと主張する。G. F. Else, *The Structure and Date of Book 10 of Plato's Republic*, Heidelberg 1972 は "of course eccentric

は『国家』第 10 巻の位置づけを不安定なものとしている<sup>5</sup>。本稿では第 10 巻の議論を、その導入の文脈を手がかりとして中心巻のアイデア論と照らし合わせ、これらの問題に回答したい。すなわち、第 10 巻はミーメシスのもつ制作という局面に焦点を当て、アイデア論における画家という視覚に係る制作モデルの検討を通じて、中心巻の探求の行程に潜む危うさを確認し、国制建設を完成させる議論である。そして、第 10 巻の神によるアイデア制作は中心巻で語られた哲学者のミーメシスのための、すなわち哲学者が神に似る営みのための範型として位置づけられていることになる、と<sup>6</sup>。

## I 不整合の確認

### 1) 画家の位置づけの変化

第 6 巻において哲学者は「国制の画家 (πολιτειῶν ζωγράφος)」(501c6-7)と規定される。

T1 「神的な範型を用いて描く画家たちがポリスの輪郭を描くのでなければ、ポリスは決して幸福になることはないだろう」。(500e1-3)

この哲学者による理想ポリスの制作は、第 6 巻では、画家のそれに即して説明される(例えば 501a2-c3)。他方、第 10 巻において画家は T1 の哲学者とは対照的に位置づけられる。

T2 「ええ」と彼 [グラウコン]<sup>7</sup>は言った、「[ミーメシスを行う者は] そう見えるもの (φαινόμενα) を、しかし決して真実にはあるものではないものを [制作している]」。／「素晴らしい」とぼく [ソクラテス] は言った、「議論にとって必要なことを言ってくれた。というのは、ぼくが思うに、画家もまたそういう作り手の一人だからね」。／「もちろんです」。／「しかし、彼は自分が制作しているものを真実のものとして制作しているのではないと、君はきっと主張するだろう。とはいえ、ある仕方では、その画家もまた寝椅子を制作している (ποιεῖ)、そうではないか」。／「ええ」と彼は言った、「彼もまたそう見えるものを制作しているのです」。(596e4-11)

---

and bothersome” (32)としつつも、“The divine production / begetting is an expression of objective truth” (33)と主張する。

<sup>5</sup> 例えば、J. Annas は “Book10 itself appears gratuitous and clumsy, and it is full of oddities.” と評している (*An Introduction to Plato's Republic*, Oxford 1987, 335)。

<sup>6</sup> プラトンのミーメシス概念に関して、Nehamas 1999 [1982], 262-3 は “an imitation of appearance” と “produce appearance” の間で揺れ動いていると評しているが、田中一孝『プラトンとミーメシス』京都大学学術出版会 2015, 40-1, n.41, 98 n.16 が指摘するように、そもそもどちらかの概念に統一して解釈することには無理があると思われる。

<sup>7</sup> 以下、引用における [ ] は指示対象の、[ ] は意味上の田中伸司による補足。

T1 は比喩であるとしても、T2 のような第 10 巻における画家の位置づけは、少なくともその制作物の存在論的な性格の点で、中心巻とは全く異なったもののように見える<sup>8</sup>。

## 2) 神によるアイデアの制作

中心巻において、アイデアはつねに同じ仕方で存在し (479a2, 479e6-7)、「完全にあるもの」(477a3) とともに「純粹にあるもの」(477a7, 478d6, 479d4) とともに呼ばれる。他方、第 10 巻では、アイデアを、神が制作したと主張される。

T3 「それらは三種の寝椅子ということになる。一つは自然本性においてあるものであり<sup>9</sup>、それは、ぼく [ソクラテス] が思うに、神が作ったと私たちは主張するだろう (*μία μὲν ἢ ἐν τῇ φύσει οὖσα, ἣν φαίμεν ἄν, ὡς ἐγῶμαι, θεὸν ἐργάσασθαι*) 」。 (597b4-5)

当然のことながら、T3 の神の作った寝椅子こそが真に存在するものとされる。

T4 「したがって、思うに、神はこうしたことを知り、ある特定の寝椅子の、ある特定の寝椅子制作者であることをではなく、真にある寝椅子の真に制作者であることを望み、自然本性の点で一つの寝椅子を生みだした (*μίαν φύσει αὐτὴν ἔφυσεν*) 」。 (597c11-d2)

そのうえで改めて、神が制作者であることが確認される。

T5 「では、私たちはこの方 [神] をそれ [寝椅子] の作者と呼ぶことにしようか、あるいは何かそういう者と」。 / 「確かに正当なことです」と彼 [グラウコン] は言った、「これも他のすべてのものも、まさに自然本性の点で制作した (*φύσει γε ... πεποιήκεν*) のですから」。 (597d4-7)

さて、以上の不整合は、テキストを額面どおり受けとるなら、調停の余地は少ないように見える。そこで、なぜ第 10 巻の議論が導入されたのか、その文脈を確認することにしよう。そうすることで、『国家』におけるこれらの不整合の位置づけを把握することが

<sup>8</sup> N. Demand 1975, 1-20. 田坂さつき「技術と正義 —プラトン『ポリテイア』第十巻 (595a1-608c1) の一解釈—」『立正大学文学部研究紀要』28, 2012, 6-7 (cf. 10-11) は 595c6-597e8 では知識を示す語が、第 5 巻のアイデア論導入時と異なり、全く用いられていないと指摘する。

<sup>9</sup> ἐν τῇ φύσει という限定句については「自然本性において」と直訳した。関村誠『像とミーメーシス —プラトンからの美学—』勁草書房 1997, 139-41 の指摘があるが、中心巻のアイデア論、例えば後述の T19 や T20 をこの文脈に読み込むことが適切であれば、藤沢訳の「本性 (実在) 界にある」は意を尽くした訳であることになる。なお、人工物である寝椅子の「自然本性」については M.F. Burnyeat, 'Culture and Society in Plato's Republic', *The Tanner Lectures on Human Values* vol.20, 1999, 248-9 参照。Burnyeat は、善・美・正義というアイデアとは異なり、そうした諸アイデアが実際の (過去、現在、未来の) 社会から独立の基準を与えつつも、知覚される世界に人間の生活があるということを前提すると論じている。

できるはずである。

## II 第 10 巻の位置づけ

第 10 巻は次のソクラテスの言葉によって開始される。

T6 「それ [そのポリス]<sup>10</sup>については他の多くの点でも、つまりはこのうえなく正しくそのポリスを私たちは建設してきたと、ぼく [ソクラテス] は考えているが、とりわけ詩 [制作] のことを考えてそう言っている (*ἐνθυμηθεῖς περὶ ποιήσεως λέγω*)<sup>11</sup>」。  
(595a1-3)

新たなスタートを切ったようにも見えるが、T6 は第 9 巻末におけるソクラテスと対話相手のグラウコンとのやりとりを受けている。すなわち、グラウコンの「[哲学者は] ポリスに関すること (*τά ... πολιτικά*) を行おうという気にはならないでしょうね」(592a5) という発言を受けて、ソクラテスは「自分自身のポリスにおいてこそは大いにその気になる」(592a7) と言う。

T7 「分かりました」と彼 [グラウコン] は言った、「いま私たちが建設し論じてきたポリス、言論のうちに置かれているポリスにおいてということを行っているのですね。そのポリスは少なくとも地上のどこにもないと思いますから」。／「いや、それは」とぼく [ソクラテス] は言った、「天空に、おそらく範型として掲げられている、それを見ようと望みかつそれを見ながら自分自身を作りあげようとする者のためにね」。(592a9-b2)

哲学者のポリスが「少なくとも地上のどこにもなく」言論のうちに置かれているというグラウコンの発言に対して、ソクラテスは「天空に」視覚の対象として掲げられていると明言する。些細な違いのようなではあるが、哲学者自身のポリスに関して認識の差がある

<sup>10</sup> Burnyeat 1999, 289 n.9 (cf. 290 n.14) は T6 の「それ (*αὐτῆς*)」(595a1) の指示対象が第 9 巻末であることを指摘し、このことが “confirms that book X was written to be read as part of the main body of the work” と主張する。第 10 巻冒頭が第 4 巻以降の展開を前提としていることについては荻野弘之「詩人の場所 — 『国家』第十巻の「詩人追放論」(一) —」東京女子大学紀要『論集』No.39(2), 1989, 4, Nehamas 1999 [1982], 256、栗原裕次『プラトンの公と私』知泉書館 2016, 324-5 参照。pace Else 1972, 8-9, 21 (cf.24).

<sup>11</sup> Nehamas 1999 [1982], 254-6 が指摘するように、ポリスの構成要素としての詩については第 3 巻以降言及されておらず、595a3 の *περὶ ποιήσεως* を詩作に限定して理解すると、T6 は唐突な印象を与える。他方、哲学者が自己自身を形作る T7 と接続させて理解することには無理がなく (前注参照)、「[制作]」と補った。

ことが示唆されている。事実、T7に続く議論でソクラテスは、

T8 「詩〔制作〕のうちでミーメシスの術を行うものは、決して受け容れない」  
(595a5)

と宣言したうえで<sup>12</sup>、グラウコンをからかうかのごとく、次のように問う。

T9 「ミーメシスとは、全体として、いったい何であるかということぼく〔ソクラテス〕に言うことができるかね。というのも、それが何であろうとしているのか、ぼく自身はよく分からないからなのだが」。／「すると、この私〔グラウコン〕ならたぶん分かるだろうということですね」。／「奇妙なことではないよ」とぼくは言った、「鋭く見る者たちよりももっとぼんやりと見ている者たちのほうが先に見つけることもよくあることだからね」。(595c8-596a1)

グラウコンは「もっとぼんやりと見ている者」として問われており、これがオックスフォード・クラシカル・テクスツで約三〇行前の T7 へと至る哲学者のポリスについての理解を踏まえた表現であると考え無理のない想定であろう。つまり、哲学者の「ポリスに関すること」についてのグラウコンの理解を受けて、ミーメシスの何であるかをグラウコンに尋ねたのだ、と。すなわち、グラウコンはそのポリスを哲学者が統治者となる「美わしのポリス」(527c2)のことだと考えており<sup>13</sup>、「言論のうちに置かれている」と発言した。しかし、第9巻までソクラテスたちが建設してきたポリスは、たとえば「地上のどこにもない」としても、真理が存在と結びつけられて理解されるのであれば、その実在性は確信されなければならないはずである。実際、ソクラテスの考える哲学者のポリスは「天空に掲げられて」おり、「それを見ながら自分自身を作りあげ」るための「自分自身の内なる国制 (*τὴν ἐν αὐτῷ πολιτείαν*)」(591e1)の範型に他ならない。この理解の差が、ソクラテスの国制制作と詩人たちのミーメシスとの違いを問う必要性へと繋がっている。というのも、ソクラテスの営みが実在と結びついていないのであれば、言

<sup>12</sup> T8 が第3巻 (e.g. 397d4-5) や第10巻 (607a3-4) と齟齬する点については Nehamas 1999 [1982], 252-6 参照。

<sup>13</sup> とはいえ、第7巻末には「善そのものを見たなら、それを範型として用いて、順番に各人がポリスと個々人と自分たち自身を秩序づけるよう、残りの人生の間、強制しなければならない。すなわち、一方で大部分の期間は哲学することによって過ごしながら、他方で順番が来たなら、各人はポリスの政治の仕事に (*πρὸς πολιτικὰ*) 労苦し、ポリスのために統治をしなければならない」(540a7-b4) と述べられており、グラウコンの理解にもそれなりの根拠を示すことができる。しかしこの 540a7-b4 では、哲学者たちは「ポリスの政治の仕事」へと強制されている。もちろん、そのポリスは天空において掲げられてもいない。したがって、それは T7 でソクラテスの意味しているポリスではない。他方、T6 の「それ」とは、ソクラテスが「私たちが建設してきた」(595a2) と述べているように、T7 でのソクラテスの「哲学者自身のポリス」ではなく、グラウコンの考える「それ」つまり「美わしのポリス」を指している。

論による制作というかぎりでは、詩人たちのそれと違いがないことになるからである。このような文脈において、ソクラテスは哲学者の内なる国制を「作りあげようとする」ことに係ってミーメーシスに言及し（595a3: T3）、T9のミーメーシスの問いを發したのである。第10巻のミーメーシスをめぐる議論の最後に、ソクラテスは次のようにグラウコンに語りかけている。

T10「それでは、私たちは次のことが分かっていることになる、そのような〔快樂を目指してミーメーシスの術を行う〕詩について、真理に触れていて重要であるからと、熱心になるべきではない。そうではなく、それに耳を傾ける者は自分自身の内なる国制（*τῆς ἐν αὐτῷ πολιτείας*）を心配して、それを警戒しなければならない。そして私たちが詩について語ったことどもは法とされなければいけない（*νομοστέα*）<sup>14</sup>、と」。  
（608a6-b2）

グラウコンの同意を得て、ソクラテスは第8から9巻で論じた「名誉や金銭や権力」（608b5-6）という不完全国家へと転落していく要因に、ここで「そのような〔快樂を目指してミーメーシスの術を行う〕詩」（608b6-7）を加えて、議論を締めくくるのである。

では、どのようなミーメーシスが問題にされているのだろうか。ミーメーシスは第2から3巻ではパフォーマティヴな面が強調されていたが、第10巻では鏡像制作によって説明される。

T11「いろいろなやり方で、すぐにも作りだせるのだが、もし君が鏡を手にとってあらゆる方向に、ぐるりとめぐらせようとするなら、たぶんもっとも早く作りだせる。君はたちまち太陽や諸天体を制作するだろうし、たちまち大地を、またたちまち君自身およびその他の動物を、家具を、植物を、そしてたったいま述べられたものすべてを制作するだろう」。／「ええ」と彼〔グラウコン〕は言った、「そう見えるものを、しかし真実には決してあるのではないものを」。（596d7-e4）

鏡に映しだすという例が示すように、ミーメーシスという制作には対象についての知も範型も必要ない。とりわけ、T11の「君自身」という例は示唆的である<sup>15</sup>。私たちは自分自身を見ることなく、鏡に映しだすことで「自分自身と見えるもの（*φαινόμενα*）」を用

<sup>14</sup> この「法」とは 604a9 及び 607a7 のそれを受けている。602c1-608c1 での法と魂の関係については、中畑正志「ロゴス — 「理性」からの解放—」『イリソスのほitori — 藤澤令夫先生献呈論文集—』世界思想社 2005, 407-28 参照。

<sup>15</sup> T11 の直前にも「すべての動物を、他のものも自分自身をも、作る（*ἐργάζεται ... ἐαυτόν*）」（596c7）と言われている。

いて自分自身のことを確認するからである<sup>16</sup>。いわば、鏡像が自分自身についての知を与えてくれる関係となっている。このような鏡像制作が示唆しているのは、それぞれのものがなければミーメーシスが成立しないにもかかわらず、ミーメーシスに接する人にはミーメーシスの元となるそれぞれのものが忘れ去られ、「そう見えるもの」がそれぞれのものであるかのような逆転が生じるという悖理である。

さらに、T11 のあらゆるものを制作するとされる鏡像制作者は「凄腕の ( $\Delta\epsilon\iota\omega\acute{\nu}$ )」(596c3)「ソフィスト」(596d1) と呼ばれているが<sup>17</sup>、「画家もまたそのような作り手たちである」(596e5-6) と語られる。すなわち、画家は「そう見えるもの」(596e11: T2) の制作者として、大工のような技術者たちとは異なる制作に係る者と位置づけられる。前出の T5 は次のように続いている。

T12 「では、大工はどうだろう。寝椅子の作り手と呼ぶのではないか」。／「ええ」。／「では画家もまた、そのようなものの作り手であり制作者であると」。／「いいえ、決して」。／「すると、画家を寝椅子の何であると言うつもりなのか」。／「こう呼ぶのが」と彼 [グラウコン] は言った、「私としては最も適切であるように思います、つまり、先の二者がその制作者であるものをミーメーシスする者であると<sup>18</sup>」。／「よし」とぼく [ソクラテス] は言った、「すると、その自然本性から離れること ( $\acute{\alpha}\pi\omicron\ \tau\eta\varsigma\ \phi\acute{\upsilon}\sigma\epsilon\omega\varsigma$ ) 第三のものを生み出す者を、ミーメーシスする者と呼ぶわけだね」。／「全くそのとおりです」と彼は言った。／「すると、悲劇詩人もまた、もしミーメーシスする者であるならば、王と真理から離れること ( $\acute{\alpha}\pi\omicron\ \beta\alpha\sigma\iota\lambda\epsilon\omega\varsigma\ \kappa\alpha\iota\ \tau\eta\varsigma\ \acute{\alpha}\lambda\eta\theta\epsilon\iota\acute{\alpha}\varsigma$ ) 第三の何者かであることになるだろう<sup>19</sup>、そして他のすべてのミーメーシスする者もだ」。(597d8-e8)

<sup>16</sup> 現代の反射鏡のような鮮明な像を結ぶことはないが、鏡像と元のものとの取り違えという事態は古代の金属鏡でも指摘されている。しばしば参照されるのはナルキッソスの物語であり、彼は「水を飲んでいるとき、泉に映った [自分の] 姿の像 (imagine formae) に魅せられて実体なき望みを愛し、影 (umbra) であるものを実体と思い込む」(Ovid, *Metamorphoses* vol.1, the Loeb Classical Library, London 2nd ed. rep. 1960 [1921], Book III 416-7)。ナルキッソスの物語では、それが自分の姿の像だと理解した後もこの関係は変わらない。なお、水面に映る像は『国家』では鏡像と同列に扱われる (T20 及び注 28 参照)。

<sup>17</sup> ミーメーシスに係る者とソフィストとの重ね合わせ、特に『ソピステス』との平行関係に関しては、E.C. Keuls, *Plato and Greek Painting*, Leiden 1978, 44-7 及び N. Notomi, 'Image-Making in Republic X and the Sophist', in *Plato and the Poets*, P. Destrée & F-G.Herrmann (eds.), Leiden / London 2011, 311-6 参照。なお、S. Halliwell, *The Aesthetics of Mimesis: Ancient Texts and Modern Problems*, Princeton / Oxford 2002, 133-42 は T11 に “the rhetorically provocative character” (135) を指摘し、“not a definitive conclusion but a dialectical gambit” (136) と主張する。

<sup>18</sup> この規定は直後に問い直され、画家がミーメーシスするのは「自然本性においてあるもの」ではなく、職人たちの制作物であることが確認される (598a1-4)。

<sup>19</sup> 第 9 巻の 587a8-e4 の議論に似ているが、第三という位置づけは J. Adam, *The Republic of Plato*, vol. 2, Cambridge 2nd ed. rep. 1965 [1902], 464-5 及び藤沢令夫 2008 [1975], 465-70 が指摘するように、線分の比ゆの導入時の「思惟によって知られる種族と領域に王として君臨する ( $\beta\alpha\sigma\iota\lambda\epsilon\acute{\upsilon}\epsilon\upsilon$ )」(509d1-2) という記述を受けた、イデアに係る序列づけによるものである。

この「王と真理から離れ」ていることが、T11 で示されたミーメシスの術の万能性を起因するとされる。

T13 「するとミーメシスの術はおそらく真理から遠くにあり、そのことのゆえに、あらゆるものを作りあげる (*ἀπεργάζεται*) ように思われるのだ。つまり、それぞれについて、ほんのわずかな何かに、すなわち影像としてのそれに (*τοῦτο εἶδωλον*)、触れていることによるのである」。 (598b6-8)

したがって、ミーメシスの術を行う者たちは「あるもの (*ὄντα*) をではなく、現れ (*φαντάσματα*) を制作している」 (599a3) と言われるのだが、この「真理から遠くにある」という点はさらに次のように説明される。

T14 「絵画および一般にミーメシスの術は、真理から遠く離れたところに自らの作品を作りあげる (*ἀπεργάζεται*) というだけでなく、他方では私たちのうちの、思慮から遠く離れた部分と交わるものであり、それも何ひとつ健全でも真実でもないものごとを目的として〔以下略〕」。 (603a9-b3)

この「何ひとつ健全でも真実でもないものごとを目的」とするミーメシスの術は、「陰影法 (*ἡ σκιαγραφία*) が私たちの自然本性にそなわるパトスにつけ込む」 (602d2-3) ように、私たちの魂に「あらゆる混乱」 (601d1) を引き起こす<sup>20</sup>。というのも、「〔悲運に遭遇し悲嘆する人物に〕抵抗することを命じるのは理性と法であるが、他方で悲しみに引きずっていくのはまさにパトス」 (604a9-10) であり、詩的ミーメシスとはパトスの再現だからである<sup>21</sup>。そして、「理性や習慣によって十分に教育されていない」 (606a7-8) とき、そうしたパトスが再現されるのを観ても、それは「他人のパトスを観ているのであり、優れた者と称する他の男がみだりに悲嘆にくれるとも、自分自身にとっては何ら恥ずかしいことではない」 (606b1-3) と考え、パトスに浸ることで快楽を得る「魂の愚かな部分」への「監視をゆるめてしまう」 (606a8) からである<sup>22</sup>。このようにして、詩的ミーメシスは人びとの魂のうちに悪しき内なる国制を作っていく。

<sup>20</sup> Demand 1975, 5-6 及び Keuls 1978, 59-62, 78-9 は古典期のギリシア絵画について考古学資料がほとんどなく、文献史料を拠り所とせざるをえないと指摘している。Keuls 1978, 78-84 に従えば、陰影法は色彩上の融像を利用する分割描法であり、その絵画は適切な距離をとって眺められる必要があったとされる (cf. Demand 1975, 6-7)。つまり、陰影法は T12 から T15 の「王と真理から遠く離れている」という事態を表すうまい事例であることになる。

<sup>21</sup> 高橋雅人『プラトン『国家』における正義と自由』知泉書館 2010, 233-8 は「情念に関しては、在るもの (*τὸ ὄν*) と現れるもの (*τὸ φαινόμενον*) との区別がなくなる」 (233-4) と指摘し、Nehamas1999 [1982], 269 を踏まえて、「われわれが享受する詩の喜びとは「再現された悲しみではなくてむしろ悲しみの再現」なのである」 (239) と論じている。

<sup>22</sup> 第 9 巻においてソクラテスは「陰影法による類い〔の快楽〕」 (583b5) を論じ、「〔大衆は〕苦痛と混じり合った快楽に、つまり真実の快楽の影像であり陰影法による快楽に、すな



T15 「ミーメーシスの術を行う詩人もまた、各人の魂にそれぞれ悪しき国制を制作する (*ἐμποιεῖν*) と、私たちは言うべきだろうね、魂の愚かな部分の、より大きいかより小さいかも識別できず、同じものをときには大と思いときには小と思うような部分の機嫌をとり、真理からはるかに遠く離れて、影像作りをすることによってね」。(605b5-c3)

それゆえ、ミーメーシスの術を用いる詩作が行われるかぎり、国制転換の危機に脅かされる。

T16 「もし君が、抒情詩にせよ叙事詩にせよ、快く装われたムーサを受け入れるならば、ポリスにおいては、法とつねに最善であると公に認められた理性<sup>23</sup>に代わって、快樂と苦痛が王として君臨することになるだろう (*βασιλεύστων*)」。(607a5-7)

ところで、T12 にさりげなく悲劇詩人が登場するが、T13 のミーメーシスの術の規定を受けてホメロスと悲劇詩人が本格的に議論の俎上に載ることになる (598d8-9)。実は、ホメロスと悲劇詩人は第 10 巻のミーメーシス論を開始する際に既に登場していた。

T17 「君たち [グラウコンたち] はぼく [ソクラテス] のことを、悲劇の制作者 [詩人] たちや他のあらゆるミーメーシスの術を行う者たちに、こんなふうに告発しないだろうからね、つまり、どうもすべてそうしたものは聴く者たちの思考 (*διανοίας*) を損傷することになると思われるのだ、それらがまさにどのようなものであるかを知ることが解毒剤としてもっていないかぎりにはね、と。[中略] 彼 [ホメロス]こそは、悲劇の優れた制作者たちすべての最初の教師にして導き手となったように思えるからね。しかし、真理よりも人が尊重されるべきではないのだ」。(595b3-c4)

つまり、第 10 巻におけるミーメーシスの議論とは、画家を例にとり上述の悖理を生じさせるものとミーメーシスを規定したうえで、悲劇詩人へと立ち戻るといふ議論構成を

---

わち「快と苦を」相互に置くことによって色づけられ、どちらも強烈なものに見える、そういう快樂になじむのが必然である」(586b7-c2)と指摘していた。Cf. Keuls 1978, 82-4.

<sup>23</sup> 中畑正志 2005, 411ff.はこの「理性」が 604a9-10 (中畑は Burnet の校訂を使用するため行数が異なる)と「緊密に対応したもの」(411)と指摘し、「公共的規範とのかかわり方という視点」(421)から分析を行う。なお、T16 の「ロゴスとノモス」という観点は第 6 巻の「ポリスにおいては、国制についての、立法者たる君 [グラウコン] が法を制定していたときに有していたのと、まさに同じロゴスを有している何かがつねになければならない」(497c8-d2)という指摘を反映している。この「ロゴスを有している何か」は哲人統治者を指すわけであるが、497c8-d2 の要求の意味については高橋雅人 2010, 121-34 参照。

とっているのである<sup>24</sup>。次節「アイデア論との関係」に移る前に、改めて悲劇詩人たちのミーメーシスがなぜ問題とされたのかを確認しておこう。

T18「それでは、ホメロスから始まる詩作の術を行うあらゆる者たちは徳やその他の、彼らが制作している対象の、影像をミーメーシスする者であり、その真理には触れてはいないと、私たちは確立することにしようか。それはちょうど私たちがたった今言っていたのと同様で、画家自身は靴作りについて知識がないのに、〔靴作りについて〕知識のない者たちに対しては、つまり色と形で観る者たちに対しては、画家は革細工師〔靴の作り手〕であると思われるものを制作することになるだろうねと」。(600e4-601a2)

T18の「知識のない者たち」とはT17の知るという「解毒剤」を持っていない者たちである。彼らの目には、ホメロスをはじめとする詩人たちが「あらゆる技術を、また徳と悪徳にかかわる人間のことすべてを、さらには神のことまでも、知っている」(598e1-2)と映り、「戦争や軍隊の統帥やポリスの統治について、そして人間の教育について」(599c7-d2)「真に人間たちを教育し優れた者にすること (*ἀπεργάζεσθαι*) ができる」(600c3-5)と見えることになる。というのも、T13からT15が指摘したように、ホメロスたちの用いる影像は真理との関係性が見失われかねないものであり、また、T11に即して確認したように、それが別の何かの影像であることが見失われるとき、「それに耳を傾ける者」(T10)でかつ「知識のない者たち」(T18)には、(影像ではなく)そのものであるように受け取られてしまうものだからである。制作のなかの、このようなホメロスや詩人たちのミーメーシスが第10巻の議論の標的なのである<sup>25</sup>。

### Ⅲ アイデア論との関係

1) 画家の位置づけの変化は何を示しているのか。

第10巻のミーメーシスを規定しているT11の位置づけを、哲学者が自分自身の内なる国制の建設を行っている中心巻と対照し、明確にしておくことが有益であろう<sup>26</sup>。例えば、

<sup>24</sup> ミーメーシスの議論の発端であるT8は「詩〔制作〕」についての発言であった。荻野弘之1989, 5, 11-12は画家が第10巻において詩人たちのミーメーシスの構造を示すためのモデルであると論じ、Burnyeat 1999もまた絵画が詩的ミーメーシスの意味と脅威を説明するうえでの“paradigm”(263)であると指摘している。

<sup>25</sup> 中心巻では哲学者もミーメーシスを行うと語られており(T24)、必ずしもすべてのミーメーシスが排除されるわけではない。第10巻のミーメーシスで問題とされるのは、田中一孝2015(特に第3章及び第4章)が指摘しているように、「像と「あるもの」の取り違い」である。

<sup>26</sup> 第10巻のテキストを中心巻のアイデア論から考察する意義については藤沢令夫2008[1975], 468及び納富信留「『国家』篇中心巻への接近—問題提起と視点素描—」『人文科学』18, 2003, 23参照。但し、中畑正志「プラトンの『国家』における<認識>の位置」『西洋古典学

第7巻の洞窟の比喩には T11 の鏡像を思わせるような箇所がある。

T19 「だから、ぼくが思うに、上方のものごとを見ようとするならば、慣れが必要だろう。すなわち、まず影なら (*τὰς σκιὰς*)、最も楽にしっかり見るだろうし (*καθαρῶ*)、その次には水に映る人間の影像やその他の影像 (*τά τε τῶν ἀνθρώπων καὶ τὰ τῶν ἄλλων εἶδωλα*) を、後になってからそれらを、と。それでそれらから次は、夜に、天空においてあるものや天空そのものを楽に観ることになるだろう、日中に太陽とその光を見るよりも星や月の光のほうがね」。／「もちろんです」。／「それで最後には、思うに、太陽を、水やその他の座にある現れ (*φαντάσματα*) をではなく、それ自身の場においてそれ自体をしかと見て (*κατιδεῖν*)、それがいかなるものであるかを観ることができるようになるだろう」。／「必然です」と彼 [グラウコン] は言った。／「こうした後には、それについてもう次のように推論するようになるだろう、それは季節と年の巡りをもたらし、目で見られる場所におけるすべてを統治し、自分たちが [洞窟で] 見ていたものすべてについても、ある仕方で、原因となっているものなのだ、と」。 (516a5-c2)

532b6-d1 でこの箇所が振り返られているが、そこではこの哲学者の動きを哲学的な問答法による探求の「行程」(532b4) の説明に用いることができると指摘されている。「それは思惟によって知られるものだけれど、視覚能力がミーメシスすることが可能である (*μιμοῖτ' ἄν*)」(532a2-3) と。この視覚の特質のゆえに、画家という視覚的な制作に係る者が哲学者の働きを説明するための媒体として選ばれたのであり、T1 で確認したように、第6巻の議論において「国制の画家」の働きとして先取される形で論じられていたのである。すなわち、思惟のみによって行われる哲学的問答法について、視覚モデルを用いることによって、哲学的な問答法以前の段階にある者たち<sup>27</sup>への説明が可能となっているのである。

また、T16 の「水やその他の座にある現れ」は線分の比喩では T11 の鏡像を思わせるものと併記されている。

---

研究』40, 1992, 55 n.16 は 523b5-7 を典拠として、第7巻のイデア論が扱おうとしている事態 (いわゆる「三本の指の比喩」523c3ff.) と第10巻の詩人批判で問題とされるそれ (「視覚の迷い」602c7ff.) が異なった構成を有していることを指摘する。Cf. Keuls 1978, 79-80. 他方、Halliwell 2002, 136-8 は第10巻においての絵画はイデア論には依存しておらず、そこでの存在論的な対比は “between which is more and which is less real or true” (137) であり、“Book 10’s conception of mimesis implies human intentionality” (138) と主張する。

<sup>27</sup> まさにこの点でグラウコンの理解には限界があることが第7巻において指摘されていた (533a1-4, cf. 523b5-7) 。

T20「私が似像 (*τὰς εἰκόνας*) というのは、第一に影、次に水に映る現れや隙間なく滑らかで輝くものとして形成されているものに映る現れ、そしてこのようなものすべてだ」。(509e10-510a3)

前述のように、ミーメシスを行う者たちが制作するのは「現れ (*φαντάσματα*)」(599a3)であった。とすれば、T19 や T20 に鏡像 (T11) の類いが含まれると考えることは無理筋ではないであろう<sup>28</sup>。とすれば、T11 の鏡像制作それ自体に悖理があるのではなく、観客に自分が「あらゆる職人の技も、また各人それぞれが知っているかぎりの他のすべてのことも心得ており、どのようなことであれ〔誰よりも〕より正確に心得ている」(598c8-d2)と思わせることにこそ悖理があるのであり<sup>29</sup>、それゆえに、そのような制作を行う者は「一種のいかさま師すなわちミーメシスを行う者」(598d4)と呼ばれるのである。というのも、そうした者は T19 が提示する探求の行程を妨げるからである。T17 でミーメシスが「思考を損傷する」と言われたのは、この T19 の探求への行程を阻むことと考えることもできるであろう<sup>30</sup>。例えば、T18 の「色と形で観る者たち」(601a2)は、いわば第 5 巻で論じられていた「美そのものとそれを分けもっているものとをともに観て

<sup>28</sup> E. Belfiore, 'A Theory of Imitation in Plato', *Oxford readings in ancient literary criticism*, A. Laird (ed.), Oxford, 2006, 96-7, n.21 は第 10 巻の *εἰδωλα* / *εἰδωλον* が線分の比ゆの *εἰκών* に結びつけられたため "Plato's concept of imitation of images (*eidōla*, sing. *eidōlon*) has been much misunderstood" (96) と主張する。彼女の第一の論拠は 599d2-4 (「親愛なるホメロスよ、もしあなたが徳について、真理から遠ざかること第三番目の者、私たちがミーメシスする者と規定した影像の制作者ではなく、…」) が 597e7 (T12; Belfiore は Burnet の校訂を使用するため行数が異なる) を指すという指摘であるが、この第三という規定はそもそも神のイデア制作からの序列である。次に、彼女の第二の論拠は第 10 巻の *εἰδωλον* が「〔画家がミーメシスするのは〕実際にあるとおりのものか、あるいはそう見えておりにか」(598a5)を説明するために導入された専門用語であるという主張であるが、第 10 巻での説明 (598a7-9) は中心巻での使用法と齟齬するものではない。したがって、中心巻の三つの比ゆに即して第 10 巻を理解するという本稿の企図について、Belfiore の批判は有効には働かない。但し、Notomi 2011, 325 n.130 が指摘するように、線分の比ゆでは *εἰκών* のみが用いられている一方で、この語は第 10 巻には登場しない。こうした語の使い分けに文脈の違いが指摘されるかもしれない。この点については、注 19 で触れたように、T20 の直前には T12 の「王と真理」(597e7) と関係する表現があり (「王として君臨する (*βασιλεύειν*)」(509d2))、同様の表現がミーメシス批判の文脈において用いられている (「王として君臨するだろう (*βασιλεύστέον*)」(607a6: T16)) ことから、第 10 巻の議論は中心巻のイデアと像の議論と同じ枠内にあると想定することは許されるであろう。なお、アナクロニズムではあるが、『ソピステス』の影像 (*εἰδωλον*) の規定「水や鏡に映った像さらにまた絵に描かれた像や彫刻された像」(239d7-9) に照らせば、T19 や T20 には鏡像が含まれることになる。

<sup>29</sup> Cf. E. Belfiore, 'Plato's Greatest Accusation on Poetry', *New Essays on Plato: Canadian Journal of Philosophy* Supplementary Volume IX, F.J. Pelletier and J. King-Farlow (eds.), Guelph 1983, 40, 49-50, Burnyeat 1999, 300-5.

<sup>30</sup> 第 6 巻ではソフィスト的教育が「哲学者の自然本性」(492a1)を損なうと指摘されたが、それは「民会や法廷や劇場や陣営やその他の何らかの公的に開催される多数者の集会のなかで」(492b6-8)「彼ら〔大衆〕と一緒にあって同じものを美しい、そして〔大衆が主張するのと〕同じものを醜いと主張するようになり、まさに彼らがやっていることをやろうとし、そして彼らのような者となる」(492c7-9) ことによってであった。関村誠 1997, 146-7 参照。

とること (καθορᾶν) 」(476c7-8) ができない者たちであり<sup>31</sup>、「画家のように最も真実なものへと目を向けて、つねにそれへと関係させて、できるかぎり正確に観照しつつ」(484c6-8) 見ることはない者たちである。しかし、絵画のような美しいものの制作は単に快を目指すためのものではない。線分の比ゆが示すように、(絵画のような) 影像是思惟によって知られる種族と実物に次いで「真理性の有無の度合いに応じて」(510a9) 第三の位置にあり<sup>32</sup>、哲学者の内なる国制の建設という視点からは、T19 の探求へ進む一段階であると位置づけられるはずのものなのである。

前述のように、第 10 巻では、ミーメーシスによって制作される像とミーメーシスされる当のもの(像がその像であるところのもの)との取り違えが問題となったが、実はこのことは、像を用いることにより、ミーメーシスされる当のものそれ自体や自然本性を知ることなく探求を可能とするという機能の裏面である<sup>33</sup>。換言すれば、中心巻で提示された像を用いるという探求のはらむ危うさが、第 8 巻から始まった魂と国制の歪みに関する議論を経て、第 10 巻において哲学者の内なる国制の建設に係って明らかにされたと言える。とすれば、画家がミーメーシスを行うこと自体は中心巻での位置づけと齟齬するものではない。T19 の探求の行程の一部であるべきミーメーシスの営みはその探求の文脈から分離され、例えば聴衆の歓呼を目指して独り歩きするとき、T11 で考察した悖理が現れ、不整合が生じるように見えたのである。

## 2) 神によるアイデアの制作とはどういうことであるのか

神のアイデア制作は、例えば、寝椅子の制作者が寝椅子を制作するのと同様の営みと言えるのだろうか。寝椅子を含めた道具一般の制作については、次のように確認されている。

T21 「いつも私たちは次のように言っている (καὶ εἰώθαμεν λέγειν) のではないか、それぞれの道具の作り手はそのアイデアに目を向けており、そのようにして一方の作り手は寝椅子を制作し、他方の作り手は机を制作する、そしてそれらを私たちが使い、他のものについても同様である、と。というのも、およそ作り手たちのうちの誰であれ、アイデアそのものを作りだすことはないのだから」。(596b4-8)

<sup>31</sup> これはアイデア論の導入の文脈であるが、ここでは「似ているものと当のもの」との取り違えが哲学者との差異を形作っている (476c1-d2)。田坂さつき「「観ること」と「思いなすこと」の構造 —『国家』第五巻 474b3-480a13 の一解釈—」『立正大学文学部論叢』132, 2011, 47-50 参照。

<sup>32</sup> 藤澤令夫「文藝の χάρις, ὀρθότης, ὠφελία —Platon の文藝論に関する若干の基礎的考察—」『西洋古典学研究』4, 1956, 43-7 及び n.41 はミーメーシスの ὀρθότης が「(b) [アイデアを分有している感覚的事物] への忠實性において成り立ち、それによって間接的に、(a) [アイデア] に對する忠實性が保證される」(46) と指摘する。

<sup>33</sup> 納富信留 2003, 24-6 参照。

アイデアを眺めているこれらの道具の作り手たちについて、彼らが有しているのは知識ではなく、正しい信念であることが指摘される。

T22 「すると、それぞれのもの [道具] を使う人が最もよくそれに通じている者であり、そしてそれが用いられるその使用にあたって、どのように善くあるいは悪く機能するのかを、その制作者に告げる者となるのは、全く必然だ。例えば、笛吹きは笛の制作者に、笛を吹くにあたって役に立つであろう笛について告げ、どのような笛を制作しなければならないかを命ずるのであり、他方 [制作者] は奉仕するのだ」。／「当然です」。／「それでは、一方は役に立つ笛と役に立たない笛について知っていて告げ、他方はそれを信じて制作するのだね」。／「ええ」。／「すると、同じ道具について、制作者のほうはよしあしについて (*περὶ κάλλους τε καὶ ποιηρίας*) 正しい信念をもつことになるだろうが、知っている人と付き合っ、知っている人から聞かねばならず、他方、使用する者のほうは知識をもつことになるだろう」。 (601d8-602a1)

よい道具を作るには、道具それぞれのアイデアに目を向けるだけでは足りない。道具のよさは、使用の目的によって異なるからである。寝椅子の作り手は寝椅子のアイデアに目を向けるだけではなく、使用する者の知識によって道具の「よしあしについて正しい信念をもつ」ことで、使用目的に適った寝椅子を制作することが可能となる。他方、神が制作対象であるアイデアのためにさらなるアイデアを眺めると想定することは、『パルメニデス』132a1-b2 を持ち出すまでもなく<sup>34</sup>、おかしなことであろうし、また寝椅子の使用人である人間たちからそのよしあしを聞く必要もないはずである。つまり、神の制作は大工のような道具の作り手の営みとは少なくともその制作の構図の点で異なっていることになる。

したがって、どのような意味でアイデアは制作されるのかが問われる。二点、指摘すべきことがある。第一に、神によるアイデア制作への言及に先立って、アイデアとは措定されるものであることが確認されているということである。第 10 巻冒頭部のミーメーシスの問い (T9) の後、アイデアを措定する方法が次のように語られている。

T23 「それでは、ここでいつもの方法に基づいて (*ἐκ τῆς εἰωθυίας μεθόδου*) 考察を始めようか。すなわち、私たちは何らかのエイドスが、多くのものごとのそれぞれについて、それぞれに一つあると想定することにしており、その場合それらに [アイデアと] 同じ名を与えている (*εἶδος γάρ πού τι ἐν ἑκάστον εἰώθαμεν τίθεσθαι περὶ ἕκαστα τὰ πολλά, οἷς ταῦτόν ὄνομα ἐπιφέρομεν*)<sup>35</sup>」。 (596a5-8)

<sup>34</sup> 神が、例えば寝椅子について複数のアイデアを制作することの不合理については 597c1-10 において確認されている。

<sup>35</sup> J. A. Smith, 'General Relative Clauses in Greek', *The Classical Review* vol.31, 1917, 69-71 に従っている。T23 後半部 (596a6-8) には別の訳があり、例えば藤沢 2008 [1975]は Adam の註釈を採用し、「というのは、われわれは、われわれが同じ名前を適用するような多くのもの

この T23 の後に T21、T11、T2 と続き、そして T3 の神によるアイデア制作が登場する。しかも、T21 及び T23 に示されるように、第 10 巻の議論ではアイデア論について（読者を含めて）慣れ親しんでいることが前提されている<sup>36</sup>。したがって、「神が作った」という言葉は、アイデアとは指定されるものであることが了解されているという前提のもとで読み解かれるべきなのである。すなわち、神がアイデアを作ったという主張はアイデアを、名づけのような私たちの偶然的で恣意的な取り決めを超えるものとして、「自然本性の点で（φύσει）」（597d2: T4, 597d6: T5）指定したという確認を含んでいる。実際、諸物は、それらがたまたま同じ名で呼ばれているというだけでは、それらに共通の何かがあることを保証されはしないからである。つまり、神による制作ということで、「自然本性においてあるもの（ἡ ἐν τῇ φύσει οὐσα）」（597b4-5: T3）という、私たちが任意に変更できないものが指定されていると理解されるべきであることになる<sup>37</sup>。

第二に、T3 の「神が作った（ἐργάσασθαι）」（597b5, cf. ἀπεργάσασθαι: 597c2）という語は、第 10 巻では鏡像制作（T11）を導入する際に用いられており（ἐργάζεται: 596c7, 9 [注 15]）、同系の語がミーメシスに係る箇所が登場している（「あらゆるものを作りあげる（ἀπεργάζεται）」（598b7: T13）、「[ホメロスが人びとを] 優れた者にする（ἀπεργάζεσθαι）」（600c4-5、本稿 53 頁）、「真理から離れたところに自らの作品を作りあげる（ἀπεργάζεται）」（603b1: T14）、「詩作によるミーメシスがそうしたこと

を一まとめにして、その一組ごとに一つの〈実相〉（エイダス）というものを立てることにしているはずだから」と訳している。Smith はこれに対して、1) この読みでは「たまたま同名であるもの（ἀπὸ τύχης ὁμώνυμα）」にもアイデアを立てることになり、2) T23 に続く文脈ではアイデアは一つであることに強調が置かれており、3) T23 の関係詞句（οἷς 以下）が一般的な規定として先行詞を限定するためには（1）ἄν を伴った接続法であるか（2）οἷσιν や ὄσοις という関係詞が用いられるはずであり、さらに 4) 一つの集団のなかでの「同じ名」であれば ταῦτον ὄνομα ではなく κοινὸν ὄνομα のほうが適切である、と問題点を指摘している。

<sup>36</sup> さらに「こうした議論をめぐり時間を費やしている者たちにとっては」（597a8-9）と、第 10 巻の議論に係っている者たちはアイデア論に通じていることが明言されている。他の対話篇との関係については難しいが、T21 や T23 が一人称複数形で語られていることを考えれば、少なくとも中心巻のアイデア論を想定することは問題がないであろう。

<sup>37</sup> 第 6 巻の線分の比ゆにおいて、「人工物の類い全体（τὸ σκευαστὸν ὅλον γένος）」（510a2）は自然物と同じ位置づけにある（509e6-510a4）ことから、人工物であるか否かはアイデアを指定するに際して無関係なはずである。藤澤令夫 1956, 44-5 参照。他方、Nehamas 1999 [1982], 273 n.31 は T3 が人工物のアイデアの制作を述べており、かつ可能性の希求法が用いられていることを根拠に、神のアイデア制作が“could be taken as the rather ironical statement”と指摘する。なお、寝椅子のようなモノについては、それが人工物であるという論点（人工物の自然本性については注 9 参照）とは別に、はたして『国家』の時点でプラトンがそうした事物的な存在にほんとうにアイデアを認めていたのかという問題が指摘される。実際、『パイドン』や『国家』中心巻では、大と小等の「反対的性質の共存」の問題に即してアイデアが語りだされるのであって、人間のアイデアや指のアイデアが語られることはない。とはいえ、『国家』第 7 巻の洞窟の比ゆには人間そのものを思わせる記述があり（T19 参照、但し人工物については直接の言及はない）、最終的には藤澤令夫『プラトンの認識論とコスモロジー 人間の世界解釈史を省みて』岩波書店 2014, 65-69 が論じるように、プラトンのアイデアをめぐる議論は事物的な存在と反対的性質の共存とを区別することの「抹消をこそ、積極的に志向する」（68）ように思う。

どもを私たちに作りだす (ἐργάζεται) ) (606d3-4) )<sup>38</sup>。すなわち、T3 はこうした語を用いることで、アイデアの制作が道具の制作 (例えば T22) とは異なった文脈つまりミーメーシスの文脈にあることを示唆していると考えられる。確かに神がミーメーシスするとは想像し難いが、第 6 巻において国制の画家たる哲学者がミーメーシスすることは語られていた。

T24 「真に思考 (τὴν διάνοιαν) を実在に向けておく者にとっては、人間に係ることどもへと下に目を向け、人びとと争って妬みや悪意で一杯になっている暇はなく、配列されて同じ仕方をつねにあるものどもへと目を向け、互いに不正をしなければされもせず、すべて秩序だってロゴスに従っているのを観照し、それらをミーメーシスしてできるかぎり似ようとする (ἀφομοιοῦσθαι) に時を過ごすだろう。あるいは、何であれ人が賛嘆しながら共に生きるのであれば、それをミーメーシスせずにいられると君 [アデイマントス] は思うか?」 / 「いいえ、そうせずにはいられません」と彼は言った。 / 「したがって、哲学者こそは、神的で秩序あるものと共に生きるのだから、人間に可能なかぎり秩序のある神的な者となる (κόσμος τε καὶ θεῖος ... γίγνεται) 」。(500b8-d2)

この T24 を踏まえて、「神的な範型 (τῶ θεῶ παραδείγματι) を用いる画家たち [すなわち哲学者たち] がそれ [ポリス] の輪郭をかたどる」(500e2-3: T1) と主張される。第 8 巻以降に魂とポリスに係るポリテイアの対応関係が展開されることを思い合わせれば、哲学者が自分自身を「配列されて同じ仕方をつねにあるものども」に似せようとミーメーシスすることは哲学者の内なる国制の建設を念頭に語られていると言えよう<sup>39</sup>。また「配列されて同じ仕方をつねにあるものども」が天体 (あるいは天体の運動) のことであるならば<sup>40</sup>、第 7 巻では神が天体の作り手であると語られているのだから (530a7)、T24 の文脈には神が作ったものを哲学者がミーメーシスするという主張が含意されることになる<sup>41</sup>。そしてこの T24 に続いて、哲学者のミーメーシスは徳の、いわば制作であることが確認される。

T25 「もし彼 [哲学者] に、自分自身を形作るだけではなく、あそこで目にするものを人間たちのエートスのうちに、私的にも公的にも、うち立てることを実行するという

<sup>38</sup> 荻野弘之 1989, 11 はミーメーシスの「作りだす (ἐργάσασθαι, ἀπεργάσασθαι) 」という方式がアイデアとの形相的な関係を有する職人モデルに対置されていると指摘する。

<sup>39</sup> 納富信留『プラトン 理想国の現在』慶應義塾大学出版会 2012, 235-6 は第 9 巻末尾の T7 がこの「制作」を論じる T22 を受けて語られていると指摘している。

<sup>40</sup> Adam 1965 [1902], 40 は天体の運動に言及した *Tim.* 47b-c への参照指示をしている。

<sup>41</sup> 第 7 巻において天体は「かのものども [理性と思考によって捉えられるものども: 529d2-3] を学ぶための範型」(529d7-8: T1 の「神的な範型」参照) として位置づけられていた。



強制が課されるとき、はたして君は彼を節制や正義や民衆の有するあらゆる徳の、悪しき作り手となるだろと思うか？」 / 「いいえ全く」と彼 [アデイマントス] は言った。(500d5-10)

哲学者は徳の作り手としてミーメシスするのである。ところで、T24 の「できるかぎり似ようとする事」「人間に可能なかぎり秩序のある神的な者となる」が示すように、T24 から T25 にかけての文脈は神に似ることであると解釈されてきた<sup>42</sup>。つまり、内なる国制を建設することは神に似ることであり、それは徳を身につけることとされてきたのである。神についての物語が徳に関して語られた物語であることを思い起こすなら(378e2-4)、徳のある者となることは神に似ることの方法として提示されたとも言えるであろう。そもそも「人間として可能なかぎり神々に似た者となること (θεῖοι γίνεσθαι)」(383c4) は『国家』においてポリスの守護者に課せられていた目標であった。

中心巻における哲学者のミーメシスをこのように捉えることが許されるなら、第 10 巻の神によるアイデアの制作とは哲学者のミーメシスの営みのための範型であると解してもよいであろう。実際、第 10 巻はミーメシスの術を用いた詩作に対する批判の内容を「法とすること」(T10) をもってひとまず完結させたうえで、「徳の最大の報い」(608c2) をめぐり「人間に可能なかぎり神に似ようする (ὁμοιοῦσθαι θεῶ)」(613b1) ことを目指す魂の浄化の議論(608c2-613e4) へと繋がっていく。ここから議論を振り返ってみるならば、守護者にとって神に似るという目標があるからには、ミーメシスは像を作ることのみならず、真似るという側面を欠くことができないことになる<sup>43</sup>。

## 結び

『国家 (ΠΟΛΙΤΕΙΑ [国制])』という作品において理想国建設とアイデア探求は中心的なテーマであるが、プラトンはその両者において画家というモデルを使用する。哲学者は画家のごとく理想国の国制を描き、「画家のように最も真実なものへと目を向けて、つねにそれへと関係させて、できるかぎり正確に観照」(484c6-8) する。しかし、中心巻でのアイデア探求を説明する視覚モデルの有効性は、それそのものを知らずとも理解を可能とするミーメシスの働きによるものであった。そしてまた、アイデアを制作するという神の営みは哲学者にとって国制建設の範型であり、同時に哲学者自身によるミーメシスの範型でもある。

<sup>42</sup> J. Annas, *Platonic Ethics, Old and New*, Ithaca & London 1999, 62-3 n.29, D.T. Runia, 'The Theme of 'Becoming like God' in Plato's *Republic*', *Dialogues on Plato's Politeia (Republic)*, N. Notomi and L. Blisson (eds.) Sankt Augustin 2013, 288-93, S. Tsuchihashi, 'The Likeness to God and the Imitation of Christ: The Transformation of the Platonic Tradition in Gregory of Nyssa', *Christians Shaping Identity from the Roman Empire to Byzantium*, Leiden | Boston 2015, 103 n.12, 112.

<sup>43</sup> pace V. Harte, 'Republic 10 and the Role of the Audience in Art', *The Oxford Studies in Ancient Philosophy* 38, 2010, 72-82, cf. 田中一幸 2015, 96 n.16.

つまり、第10巻における詩的（制作的）ミーメーシスに対する「最大も重大な告発」（605c5）とは、画家という視覚モデルを検証することによって、『国家』の国制建設を完成させる議論なのである。以上を確認して、筆を擱くこととしたい。

## 後記

本稿は2017年9月17日に学習院大学において開催された第21回ギリシャ哲学セミナーでの発表原稿に手を加えたものである。発表において司会の労をとってくださった高橋雅人氏には厚くお礼を申し上げます。発表会場あるいは懇親会等でご質問やご意見をお寄せ下さったのは次の方々である。荻野弘之氏、納富信留氏、高橋久一郎氏、荻原理氏、一色裕氏、栗原裕次氏、高橋雅人氏、三上章氏、中畑正志氏、荒幡智佳氏、田中享英氏、田中一孝氏。各氏からのご指摘のお蔭で論述の不適切さを正すことができた。深く感謝申し上げます。とはいえ、十分な応答に至らぬ箇所も少なくなく、申し訳なく思う。いつの日か、より完成度の高い論考へと仕上げることをお約束し、お詫びとしたい。

\*本研究は科学研究費補助金・基盤研究（B）「古代ギリシア文明における超越と人間の価値—欧文総合研究—」の研究成果の一部である。